

琉球年代記
完

ル 4
1946



門外
1946
卷

孫球年 後序



方今重熙累洽之運。寰宇寧謐。五濟鹹
生。乃優游于操觚之中。而耳濡目熟。字國
書之圃。翰墨之外。坐而談四方遐陬之風
俗。豈曰能升平之澤。所享也哉。夫疏
疎臣附于乘。三百有餘年如一日。法封朝貢。每
有懈怠。自誠款。謔快。謔不嘉尚。雖能甘
困僻。志在于極南浦之中。一革不抗。所謂
風馬牛不相及者。以在凡制度文物。人不可得
之。余嘗得一二之書。讀之。足以知寸國之梗



枕有。若波以清之士。張燮東西洋考。鄭
若智珠圖說。張學禮似珠紀異。徐葆
光中山傳信錄。周煊琉球圖史略。若我先
修之士。新井英南島志。物茂編珠球
聘使記。青木敷書。琉球紀略。未崎相幹
中山實記。編著不一。屬之可證。頃者二得斯
書讀之。功佚作者之名。雖固不詳。何人之
所著。自廿封冊甲子。躬負年月。至民間。私
凡供。既了。雖似古。舉。每。不。收。載。其。詳。畧。
出入。雖不及。傳。家。之。書。六。是。以。去。其。國。之

校。概。為。書。估。北。洋。生。利。刻。形。乞。乞。於。余。
未。謂。之。曰。昔。者。珠。球。不。貢。春。以。有。運。之。後。
受。命。三。軍。以。征。勢。以。破。外。殺。伐。于。張。自。爾。至
今。有。何。庸。于。公。家。當。建。之。時。足。踴。其。出。目。觀
寸。地。不。啻。生。之。室。之。被。茶。毒。系。三。軍。之。士。寄
命。於。孤。島。絕。域。之。際。波。濤。萬。里。之。上。昔。者。以
守。肉。食。分。勞。守。外。豈。以。身。之。之。再。聞。哉。然。不。生。
者。斯。舉。也。欲。仗。五。帝。之。德。生。後。游。于。操。觚。之。中。
生。而。淺。四。方。之。風。俗。六。是。以。去。其。國。之

此興於昇平膏澤之承乎矣哉。遂書以爲
序。

天保三年 壬辰之冬 秋 無臺陳人
東條耕書于掃葉山房南軒



- ① 年代記并來聘年曆
- ② 國王の印并花押乃圖
- ③ 王廟かくれ圖
- ④ 首里三大寺の説
- ⑤ 〃がまれ説
- ⑥ 薩王寺不動明王乃説
- ⑦ 波上寺八幡宮の説
- ⑧ 吾興寺天満大自在天祚の説
- ⑨ 天孫神の画像

- ⑩ 寶劍重金丸乃来由并圖
- ⑨ 女子の祝并圖
- ⑧ 娼妓謡歌并圖
- ⑦ 栲津少将三線傳來并祝
- ⑥ 祀女荒并圖
- ⑤ 酒の祝
- ④ 谿危利亞人紀并
- ③ 錢乃祝
- ② 君子樹の祝
- ① 古郡八郎漂流の活并圖

琉球年代記

天孫氏王 柳公孫并辭の始一男一女おぼゆる降く。
 男神色シ子リキユ女神、アマミキユといひ、三男二女
 をうひ。長男を天孫氏と云。王の始也。次男ハ、按司あんぢ、あんぢ、あんぢ
 乃始と云。三男ハ百姓始と云。長女ハクニク、次女と
 シユクと云。クニクハ天孫シユクハ、海神と云。クニクハ
 くられ神。とのに国のお後神なりと云。隋ずい、ずい、ずい
 のしゆる大業元年、推古帝何啻と云者上言す。く、
 海上御方うみのかた、うみのかた、うみのかた、これす。のりら流求と云。志をく

まひけども服さば同六年隋の兵に攻まらるる王
と殺す。その後文治二年逆臣利勇毒を以て王を弑
し自まゝ王と稱す。以て浦添按司舜天利勇を討
利勇は死す。あらくの按司舜天の位をあらひて
推して王位おほす。以上廿五代一万七千八百二年

舜天王 傳信録に舜天王は日本人皇の後裔大里按司

朝公の子浦添按司たり。逆臣利勇を討て人抱
王位おつる。心文治三年時乙酉年廿一嘉禎三年薨在位

五十一年壽七十二。○保元平治物語に云為於十八年
の時又六条末友為義と稱す。新院の中味方たり。

軍を以て伊豆國小流さる廿九歳ありて鬼ヶ島へも
帰国の後、主人のうりてはまゝ官をささへし。ひも
ら色三十三歳ありて白髪と云く。○琉球事略に云
二条院永万年中為於按司たり。たがをにたさるる
国と求め琉球をよする。主人を武勇小娘をれりて
ほわふ大里按司の妹小相具し。舜て王とす。心為朝
あつて、ほわふ日本小歸せり。云々○中山世譜紫金
蔡温撰と尚敬主の代康熙南宋乾道元年乙酉鎮西為朝
公随流至國生一子而返其子名尊敦後為浦添

按司云ニ又云舜天王姓源號尊敦父鎮西八郎為朝公母大里按司妹云ニ

舜馬順熙王舜天王乃子文治元年生 曆仁元年 位を

ひく年五十四 宝治二年 薨在位十一年壽六十四 淳祐八年

義本義本王舜馬順熙の子 建永元年生 淳祐九年 位をひく年

四十四十同國中飢饉飢饉よりより疲瘵疲瘵おぼしむるにおぼしむるにおぼしむるに

王群臣を王群臣めし曰曰飢疫飢疫よりよりおぼしむるにおぼしむるにおぼしむるに

死す死すゆゑのゆゑの羊羊ふすふすこれ我これ我不徳不徳王位王位ををおぼしむるにおぼしむるにおぼしむるに

賢人賢人をあけあけ二災二災ををおぼしむるにおぼしむるにおぼしむるに

孫孫氏氏の後後裔裔惠祖惠祖嫡孫嫡孫英祖英祖とと人人ををすす王王大子大子

よるこよるこ試小国政試小国政ととししひひとと七年七年賢賢ととすすめめ不肖不肖
とと去去りりととのの国中国中ををおぼしむるにおぼしむるにおぼしむるに
位位ををひひくく北山北山ふふととししををおぼしむるにおぼしむるにおぼしむるに
四四以上三代七十三以上三代七十三年

英祖王天孫氏の裔惠祖の嫡孫 寛喜元年 生長し伊祖

按司と按司なり 建長五年 宝祐元年 景定元年 義本義本王王か

ゆゆををひひくく年三十二 正安元年 薨在位四十年壽七十一

大成王英祖王の子 宝治元年 生 正安二年 位位ををひひくく年五十四

延慶元年 薨在位九年壽六十二 大德四年 位位ををひひくく年四十

英慈王大成王の次子 文永五年 生 延慶二年 位位ををひひくく年四十

至大元年 薨在位九年壽六十二 咸淳四年 生 至大二年 位位ををひひくく年四十

二 正和二年 薨。在位五年。壽四十六。

玉城王 英慈王の四子。永仁四年 生 正和三年 位よほく。年

十九。成王内。酒色。外。田獵。と事と。

政。と。世。に。お。り。按。司。を。な。す。

と。中山王と号し。首里真和志浦添北谷中城

越来。讀谷山。具志川。勝連。西原。与那城。泊南風原。東風

平。おの。数。國。を。領。す。餘。大里。按。司。豊見城。よ。自。立

と。山南王と号し。今。歸。仁。按。司。ハ。山。北。王。と。や。む。人。国。鼎。足

の。合。戦。一。日。も。や。む。時。な。し。建。武。三。年。薨。

在位廿三年。壽四十一。

西威王 玉城王の子。嘉曆三年 生 建武四年 位よほく。年十歳。国政

と。母。妃。よ。歸。せ。り。北。鶏。晨。と。の。な。り。ひ。あ。れ。だ

事。と。観。志。元。年。薨。在。位。十。四。年。壽。廿。三

比。時。浦。添。按。司。ふ。察。度。と。又。賢。者。あ。り。と。み。る。と。し

於。服。せ。り。ふ。王。の。世。子。と。廢。し。こ。の。察。度。ふ。志。ひ。と。王。位。と

は。か。し。む。以上。五。代。九。十。九。年

察。度。王。浦。添。間。切。謝。那。村。奥。間。大。親。乃。子。と。し。と。め

浦。添。按。司。と。り。時。西。威。王。薨。し。世。子。と。し。と。ふ。五。歳

母。妃。よ。り。政。と。み。ら。り。と。い。へ。ば。國。人。世。子。と。廢。し。て。王。位

よ。つ。く。と。観。志。元。年。あ。り。と。明。洪。武。廿。薨。在。位。四。十。六。年。壽

詳あつた

武寧王 察度王子。延文元年生。位あつた。年四十一。

は王父と云ふるがごとく。大ふくむるも。酒色田獵を好む。生。永永三年。薨。

昼夜放逸おぼゆるがごとく。按司之れをひく。在位十年。壽五十。はと兒山南王の属。下佐敷按司思紹

の子。尚巴志といふ人。父の職をつれてあつた。山南王無道

がむくふ。兵を發して。これを攻滅し。ざらむ山北王と

あり。はつて中山とせあるる。ぼし。父をすめ。めく

王位あつた。め國中を一統し。て。ふ。以上二代

五十六年

思紹王 山南王の佐敷按司より。子尚巴志。山

南王の暴虐をくみ。これをほり。わ。次才小山北中山

とたむ。げ。父として。王位あつた。む。永永十三年。あつた。永永廿八年

薨。在位十六年。壽洋あつた。生。永永九年。年三十一。あつた

尚巴志王 思紹王の子。生。永永九年。年三十一。あつた

佐敷按司とほぐ。後父として。め。王位あつた。め。永永廿九年

位あつた。年五十一。正統四年。薨。在位十八年。壽六十八。

尚忠王 尚巴志王の次子。生。永永十二年。位あつた。年五十。

文安元年。薨。在位五年。壽五十四。生。文安二年。位あつた。年三

尚思達王 尚忠王の子。生。正統十年。位あつた。年三

十八、宝徳元年 薨死在位五年。壽四十二。世子なるり。六叔父

あり。尚金福とて位をす。一

尚金福王 尚巴志王の弟六子 応永五年 生 宝徳二年 位を

す。年五十三。 景泰四年 薨死在位四年。壽五十六。是王宝徳三

年將軍義政公 錢千貫と方物を献じ

尚泰久王 尚金福王の子 永永二年 生 景泰五年 位五つ。年

四十。 寛正元年 薨死在位七年。壽四十六。

尚徳王 尚泰久王の弟三子 嘉吉元年 生 寛正二年 位ふ。年

二十一。王君なる位あり。漁獵夜とも日あり。暴虐

あり。鬼界島をひきて。卒。其首を

たさめさる。王み。將として征伐。たさめさる。文明元年

薨死在位九年。壽廿九。世子といひ。を國人弑す。成化五年

浦添間切の内間里主尚圓をあげ。位をす。以上七代

六十四年

尚圓王 字ハ思徳 金伊平 人 その先祖の 名 を 此

人あり。一説ハ 天 王 の 孫 義 本 王 位 と 英 祖 王

ふ。北山み。其後 南 と 父 ハ 尚 稷 と い ひ て

伊平里主。王。色。異 瑞 と い ふ

賢。國。早。人。の田。あめ。水

水。人。み。奇 瑞 と い ふ と い ふ と い ふ

比... 妻子とひき具... 妻子とひき具... 妻子とひき具...
 黄帽官となし... 耳目官に轉... 尚
 徳王不義... 浦添の内間... 王薨... 王薨...
 王位... 文明二年... 成化六年... 文明八年... 薨在位七年... 壽六十二
 世子尚真年十二... 王の弟尚宣威位を攝...
 尚宣威王尚圓王の弟... 世子... 弱冠... 位と
 攝... 立... 翌年尚真王不位... 越来間切...

孝... 文明九年... 壽十七... 國人義忠王
 とおろ... 越来の領主...
 尚真王尚円の子... 寛正六年... 生... 文明九年... 位よ... 年十三
 大永六年... 薨在位... 年... 壽六十二
 嘉靖七年... 尚清王尚真王の子... 明応六年... 生... 大永七年... 位... 年三十一... 弘治
 元年... 薨在位... 年... 壽五十九
 尚元王尚清王の次子... 享禄元年... 生... 弘治二年... 位... 年... 元龜
 三年... 薨在位... 年... 壽四十五
 尚永王尚元王の次子... 天文廿一年... 生... 天正元年... 位... 年... 天正十六年
 薨在位十六年... 壽三十五... 世子...

尚寧王 尚真王の孫よして尚懿と云人の子ありと尚永王世

子なりと云ふ 天正十七年 元和六年 位ふつく年廿六 泰昌元年 薨在位三十二年

壽五十七世子あり

○此時乃三司官邪那と云者明朝ふびて日本へ朝貢と云と
とやむあにわぬ薩州侯使をばつてとをたむふ邪
那とくく無礼をばつてひをれを族おひひの死とわす慶長

十三年駿府の 御城ふねりひに

神祖小まみえ奉り琉球誅伐のむよとあひ奉ゆふ請と云
とありとあひをれ同十四年二月薩州兵船數百艘を
つらつて攻めしむ同年四月きつらふ首里ふつと云

王尚寧ととるこありて凱陣を翌十五年八月六日侯尚寧

ととれ今とて駿府へ登 城と尚寧薩州小質と事

三年あやほち成悔はと謝し以来属臣とらんこと

ちろひをれ同十六年赦して本国へ歸と是よりして

薩州へ属し永世附庸此国とへあはれとありし事

將軍家慶賀のむとくへ使臣とて王子と来朝とめく

貢と献す又そ此国の代らる事

將軍家の鈎命を薩州侯よりして位をばつて他日

恩謝の使臣と奉ゆとへなりぬ

尚豊王 尚永王の弟ありと尚久王の弟四子あり 天正十八年 生

元和七年 位小比く年三十二 寛永十七年 薨在位廿年 壽五十一

尚賢王 天啓元年 生 尚豐王の第三子 寛永二年 生 位小比く年十七 崇禎十四年

正保四年 薨在位七年 壽二十三 慶安二年 生 位小比く年廿 寛文八年 康熙七年

尚質王 清順治四年 生 尚賢王の弟 寛永六年 生 位小比く年廿五 康熙四年

薨在位廿一年 壽四十一 崇禎二年 生 位小比く年廿五 宝永六年 康熙四年

尚貞王 正保三年 生 尚質王の子 寛文九年 生 位小比く年廿五 康熙四年

薨在位四十一年 壽六十五 康熙八年 生 位小比く年廿五 宝永六年 康熙四年

尚益王 延宝六年 生 尚貞王の世子尚純の子 康熙十七年 生 尚純世子たるに

うども先づらして卒せり 宝永七年 生 嫡孫 康熙四十九年 生 位と比く年三十三 康熙十年

正徳二年 薨在位三年 壽三十五 康熙十年

尚穆 寛政二年三月

尚敬王 元禄十三年 生 尚益王の子 正徳三年 生 位小比く年十四 宝暦 乾隆

元年 薨在位三十九年 壽五十二 康熙十九年 生 位小比く年十四 宝暦 乾隆

尚穆王 元文四年 生 尚敬王の子 宝暦二年 生 位小比く年十四 乾隆四年 乾隆七年

尚成王 寛政八年 尚穆王の子 位小比く

尚顯王 文化三年 尚成王の子 位小比く

尚育王 天保三年 尚顯王の子 位小比く

元和七年 位小比く年三十二 寛永十七年 薨在位廿年 寿五十一

尚賢王 天啓元年 正保四年 清順治四年 尚賢王の弟 尚賢王の弟 寛永二年 天啓五年 崇禎十四年 生 位小比く年十七

尚質王 寛永六年 慶安二年 順治五年 尚賢王の弟 崇禎二年 生 位小比く年廿 寛文八年 康熙五年

薨在位廿一年 寿四十一 正保三年 順治二年 康熙八年 生 位小比く年廿五 宝永六年 康熙四年

尚貞王 正保三年 順治二年 康熙八年 尚質王の子 生 位小比く年廿五 宝永六年 康熙四年

薨在位四十一年 寿六十五 延宝六年 康熙十七年 生 尚純世子たるに

尚益王 宝永七年 康熙四十九年 尚貞王の世子 尚純の子 嫡孫

うども先づらて卒せり 康熙四十九年 生 尚純世子たるに

位小比く年三十三 正徳二年 康熙十年 薨在位三年 寿三十五

尚敬王 元禄十三年 康熙九年 尚益王の子 生 位小比く年十四 宝暦 乾隆

元年 薨在位三十九年 寿五十二 正徳三年 康熙十年 生 位小比く年十四

尚穆王 元文四年 宝暦二年 乾隆四年 乾隆十七年 尚敬王の子 生 位小比く年十四

尚賢王
尚質王
尚貞王

○來聘年曆

- 應永十未年 ○寶德三未年 ○天正十一未年
- 同十八寅年 ○慶長十戌年 ○寬永十戌年
- 正保元申年 ○同二酉年 ○慶安二丑年
- 同三寅年 ○兼應元辰年 ○同二巳年
- 同三午年 ○寬文十戌年 ○同十二子年
- 天和元酉年 ○同二戌年 ○寶永七寅年
- 正德四年 ○享保三戌年 ○寬延元辰年
- 寶曆二申年 ○明和元申年 ○寬政二戌年
- 同八辰年 ○文化三寅年 ○天保三辰年

琉球雜話

此國を和名宇宙麻廼久爾と云まゝ屋其惹島
 とよふい方沖繩島とよ正和乃る三つふりし
 中山王のち王山北王と唱へが應永年中思紹王
 國を一統してまゝ今も中山王と稱し王城乃地名
 と首里といふ屬とふ島くをくそそく凡高十二万三千
 石余ありと云まゝとよまと言ふれ國小し文字は
 舜天王をまゝして真字仮字とも小ねるを察度王
 とよめく明へ通し經學やうやくにむしめぬ文乃讀
 法日本小むしり傳信録小載するところ和漢三才

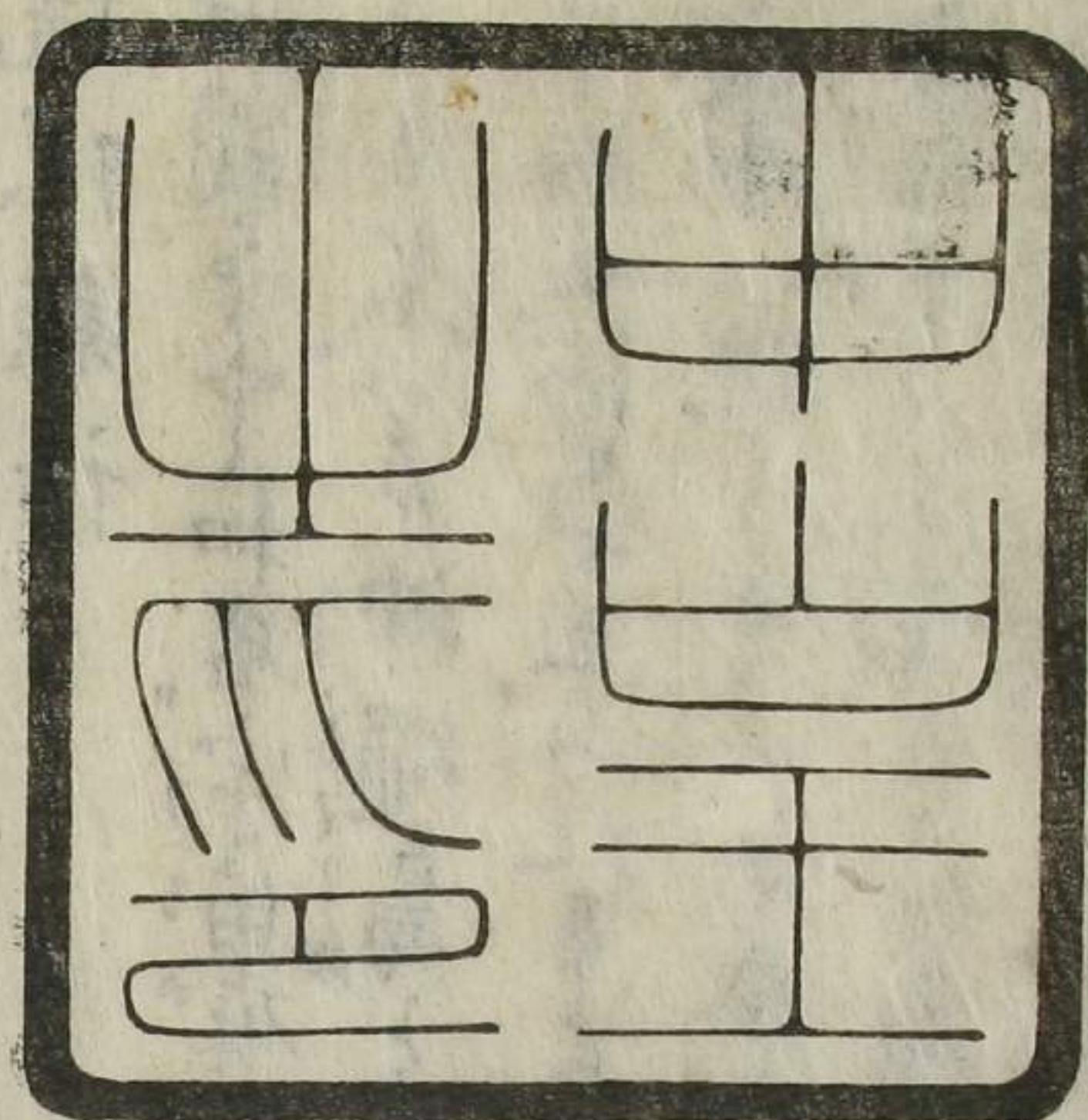
首 里 之 印



貞 益 敬



二



○國王印并小花押

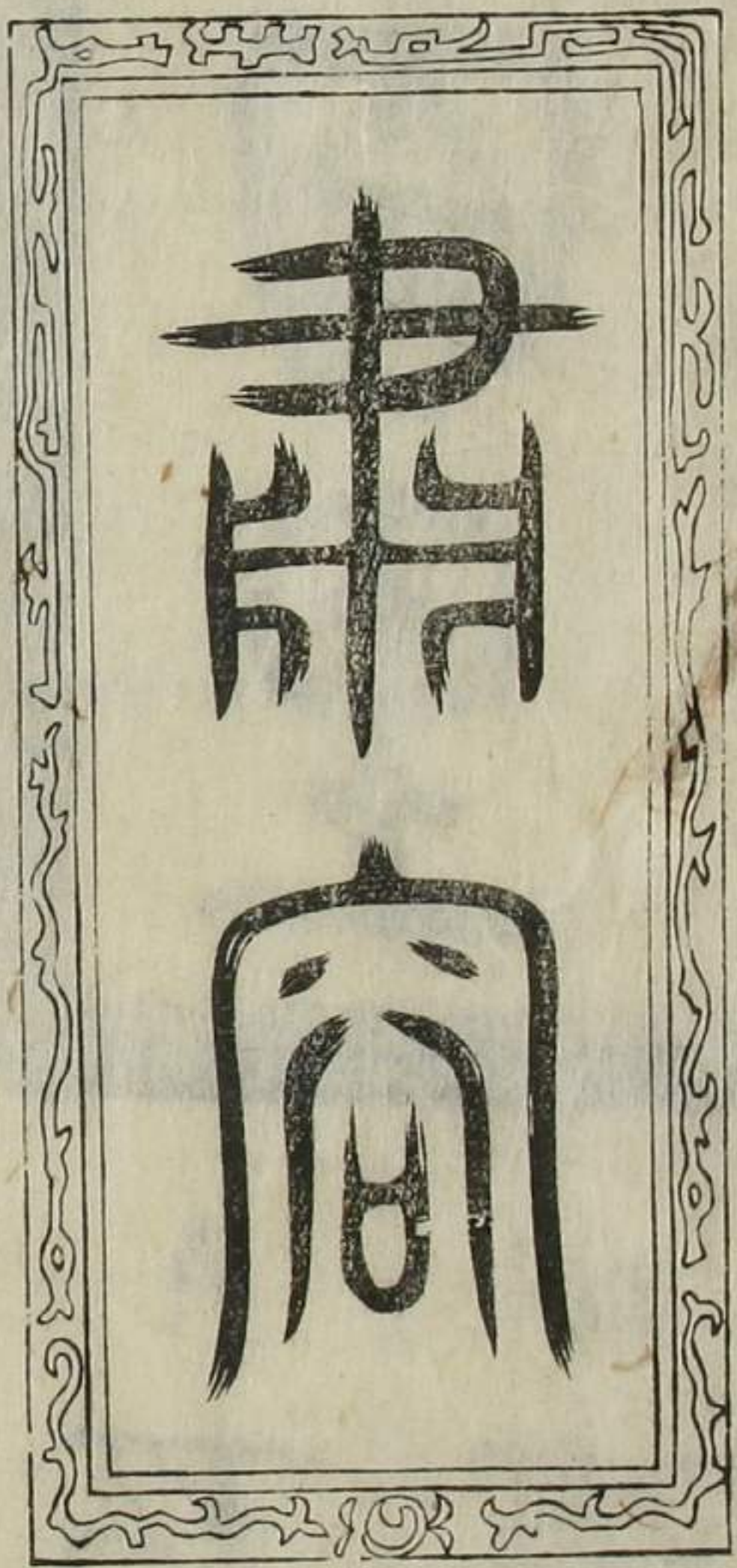
國繪おみそ日本れ古言ねるく。海く方言あるハ日本の
みくつそ七みそ去る何うなるひある。

銅印ありて鏡金虎鈕あり。
綬と紫とをもち印文を
中山王之印篆文ハ清の
乾隆年間長洲乃人
沈德潛書と伝とあり
なりと云。

三

寺院ハ臨濟真言二宗のふりく、三十七寺なり。久米村
普門寺西福寺廢し、今三十五寺となり。王廟ハ真和志
安里村あり、前堂ハ區あり。

十一



容 肅

四

首里三大寺と稱し、ゆゑ、圓覺寺天王寺天界寺なり。
圓覺寺中、小辨才天の社あり、もと莊嚴をきり、
天女堂と号し、天女橋、觀蓮橋あり、ゆゑ、勝景なり。
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、圓覺八景あり、ゆゑ、幽景れ地あり、ゆゑ、
ゆゑ、八景と稱し、地あり、中山八景の圖、周煒が國志
略、ゆゑ、ゆゑ、是と畧とあり、明洪武十一年官板の般若心經
金剛經楞伽經の注解あり、各御製の序とあり、臨濟十
八世季潭禪師の注とあり、一經づを三大寺小配
て什物とあり、ゆゑ、義槩とあり、ゆゑ、洪武廿五年かの地へ
學ふ行へん、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

炮臺のありみあるに碑何をも攬新森城と中字に彫て
下に文と刻する尚清王の御名とありしと又一石に元
之れに梵字とありしに文とありしを解
とへうらふと云ふと周煌が著る所の和文を依りし

辻山の獲国寺ハ王の祈願所ありし寺に不動明王ハ靈
巖ありし國中三分尊信ハ王の御名集詣り僧徒集會
して讀經をとり殊勝ありしと困人もはひふこれを拜す
佛前ハ銅をとりてせうたる鉢ハ水ととりてこれ數十と備
佛燈をとりて水上におきおくこれをヨカゲヒカサシ
と云拜するもの水中ハ鉢をとりてありしとありし或ハ

之のありしを合掌してのちキライカナイオホツカクヲク
ナムフドウメウワセウマイアニアヲケカライナコツゲノキニマモシ
くと数層とありし様伏とこれと佛事と移し
波上寺境内石筍崖といふ中山ハ景れ下りし海望無双
の地ハ岸れふハ幡宮ありし毎年八月十八夜國中の
男女よりはひく海邊を眺望し遊宴ありしを侵す
は化ハ阿弥陀堂ありしを左右ハ觀音藥師乃両堂とあり
尚豊王のたのむ所ハ阿弥陀堂中の像ありしをあるは子の
札ハ奉寄御幣ハ四字と刻してこれハ國の咒辞とあり
うらた天和八年壬戌とありしとありし

善興寺ぜんこうじ小天満あまみち自在じざい天神あまのかみの社あり。もとて日本よめに諸神しよじんハ
 舜天王しんてんわう尊信そんしんとてあり。今あるまで。玉たまぶらり来き借かりて
 こを礼拝らいはいとてふをま。土佐とさハ菅公すげこうありとてとてとて
 かのうにくと天神とてふ。うら混まじりあやうとてあは
 ありものありと。今小神こじん扉ひをくことをめり。拜まゐり
 をのち。神かみあふ白米しろこめとてつみをとれ。拜まゐりて。こを
 ヲサゴをわびると云。又天孫神あまのみことと云あり。三首さんしゆ六臂りくへありて。
 女神めがじんとて。これぞ天神とて。神ありて。三子さんしリキエアマミキエ
 の長女ながむすめとてあり。土佐とさあり。これに辨才べんさい天あまと云ハ
 女神めがじんあり。これに辨才べんさい天あまの像ざうあり。像ざう國くにの事ことなり。

天孫神の像



はあふ重金丸と名剣ありこれのそと山北王帕尼芝日本
 より名一太刀えしとゆふ秘珍しはさへ一應永年中
 尚巴志と名ふ数度の功にたるとその士卒とて降人ふ
 ぞ一山北王と名一騎大軍とまるとぬけ志慶真河の
 ありとまふびげのびりふ漁人きとて日本へたりまじ
 あをひしまひとせんともあはれとものけりやあらん
 としひびくみゆらうこれを言わるとおのそ首をたけ
 る太刀とやふ小川へたげふみまぞ折らとけりとの後百年
 と名ふ文明のに尚真王の代ふあるとて親泊村の川中より
 小舟に白氣をけあら金龍の玉たりのおちるとおもひくあり

しる人々これをあやしむにせられとものむとるまにちせくとも
 たりとてしよ惠平屋をゆは人の強健のものありてはあふ
 うみ一夜金氣のたけをすりあはれはとてたれは
 ありとてしよ水底ふ雷声のよたけありてはあふすこ
 しむとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよ
 とてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよ
 ありとてしよ重金の銘ありとてしよとてしよとてしよとてしよ
 珍重とてしよ重金丸の宝剣ありとてしよとてしよとてしよとてしよ
 国王第一の宝剣とてしよとてしよとてしよとてしよとてしよとてしよ
 ありとてしよ一統ふ為朝の太刀ありとてしよとてしよとてしよとてしよ

重金丸中心之図

重金

惠平屋師志魯謹摸

十一

ひんけいのわらわすのあうらふてこのつりす
 北鶏之晨者十室而九と夏子陽が録すらめくまて弁才天の島
 びりとして男子入り女は教ふと定西法師傳ふのつふ似て
 女子の平ぐ嫁せむらつらつひ父母よをあれおやもつら
 男とゆわくあそびあひのりおまをともあつて市やと
 生れぬれどもいさうものくらげさねどもてふ嫁して
 ようとれらの操をのら貞一も一罪とねらひのへあひ



とらふみけのうらむら
 心
 獄
 乃
 な
 つ

國才 娼妓をかご多し。とて風俗の琉球談ふる。竹替の
 代習 敵龜甲や。銀と插と禁と途や。貴人
 あへを草履とぬぎ。豆やみあつと法と。又浪華
 つ。ピンシマサれぬ。小舟ふりか。外島より。本舟人
 と。ひもあや。ち。酒席ふま。し。時。謡歌と。ひ
 三弦ふあ。せ。月扇をとり。坐客ね。ひ。興
 酒席れた。と。び。其。ふ。

ちごのめんふたつれがむられはのむしがごめぬ
 むらあやととゆあゆちのわんあゆのなとあちごれりんと
 こがやうに男の門お志のひよるちちちちあゆとそれとよまあづべ

ねむらりの圖



後栢原院の御宇に梅津少将と云人生質音學ふる
 應仁の乱をさけて長門國なる大内義隆なる
 少将の門に入らば若干不仕びぬ此の義隆
 の家老は陶尾張守晴賢天文廿年八月晴賢をむく九月朔日義隆
 自親も晴賢とれつら大友宗麟が弟義長
 と豊後國にひきて長門國にひきて入道して全義と号す
 私治元年十一月毛利元就なるをて全義義長あひとも自殺す
 とすのありしをさして少将を害せん王城なる
 門人これよきをさして少将もまきせし
 ほどにひきてとて義隆ふらとひし義隆文を
 毛利京のあまのひとれあひ慕風にあてつち
 あくたふひらうじて琉球小漂着しとて兼城掾司

あつとゆきふ按司のひひめと月琴と弾げん
 少将の音律おんりつふとてなるといふとて
 月琴の妙手と云ふは月琴の名手と云ふは夫婦と
 なることのみ月琴の名手と云ふは夫婦と
 このよきをさして夫婦を宮中みやうちにまゐりて月琴は
 少将王位わうゐをさしていふとてはひまの
 琉球組とせよとてこれより祖徠の琉球聘使記に
 三線歌琉曲也といふある王の曲うたふらんとて
 此の曲うたふらんとて日本へ傳へし正親町院御宇
 永祿五年の春夫婦とも豊前國ぶんぜんにてて

石田村と云ふ所はこれと云ふ所は一子をうむ幼名を石
 麻呂と云ふ所は石麻呂晩年ふみんで瞽と云ふ所は月
 琴の秘曲を父母よりうけりていふ所はこれらと云ふ所は
 して丸胴と角胴ふ製し一乳の猫皮とありて両面ふりて
 月琴と云ふ所は海老尾ふ月れをのむは此人のら
 増官して石村檢校と云ふ所はこれなり

月琴の晋の阮咸ありて丸胴ふはこれなりをうめ
 と云ふ所は三絃の元の代ふりて角ありて楊升菴詞話
 云ふ所は唐の崔令欽が教
 坊記にもみゆ琉球と云ふ所は椰子と云ふ所は胴をばこれなり

蛇皮 エラフウナキと云海蛇の皮 とめて

三尺 天地人の 棹二尺余 陰陽の 海老尾五寸 五 胴幅六寸 六

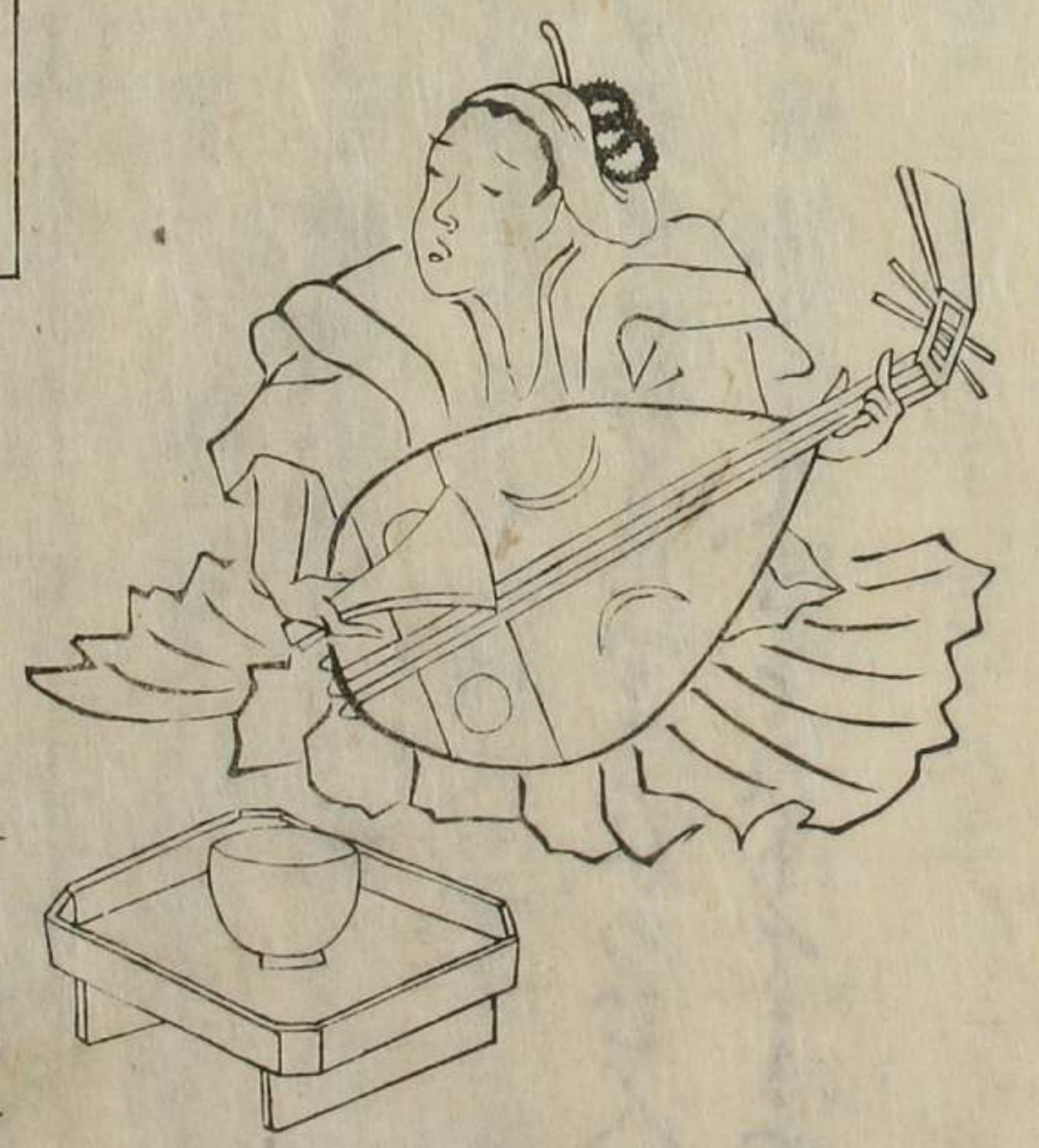
同長六寸余 地の六種 厚三寸 高下平の 轉手絃手 三形 天

柱 とも書と 糸巻 三 一の糸 精 二の糸 陸 三の糸 順

一越斷金平調勝絶の四と一の糸これ兼下無雙調
 鳧鐘黃鐘の四を二の糸小をへ鸞鐘盤涉神仙
 上無の四を三の糸小をへ十二調と云ふ三絃ふを
 今世ふりゆり三線ハ總長三尺一寸五分海老尾五寸二分
 棹二尺五分胴幅六寸同長六寸六分天手三寸五分あり

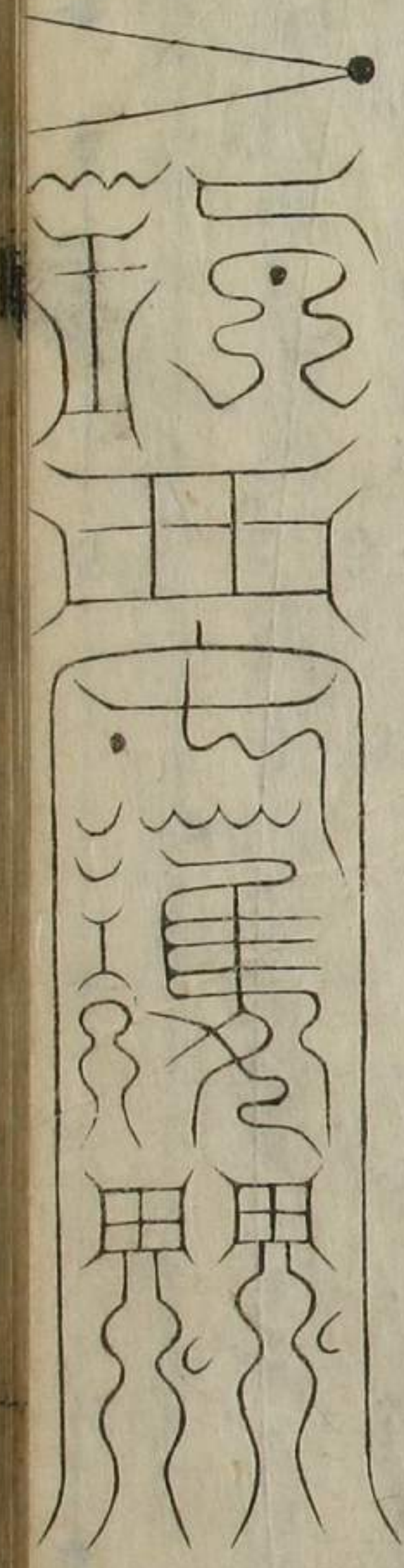
此奇なる事。託女とや。おつて巫女おわく。民間おとどく
 これを信じて。毎年正三五月と吉月として。家々おひの
 し。朝やみ。早朝より。の託女をゆめ。荒神を
 らひのめ。祈禱あり。託女のまふ。八重山酒。一盃
 と。盆小のき。才一ふ。子リキユ。アミキユ。あゆ。ゆみ。
 う。おられ。み。八幡宮。天満。自在。天神と。挿し。為。朝公。代々
 乃。賢王の。馬名。と。如。琵琶を。弾。法華。経。礼文を
 なる。荒神。の。子。天孫
 神の。祈禱。祈禱。神慮。ふ。を。キメ。テ。スリ。と。云。祈。終。を
 八重山酒をのみ。と。の。盆へ。札一枚。をお。さ。て。之。圖。左。の。下。し。

荒神をらひの図



此札園中家くふくおく

太田蜀山所藏



(五)

酒の焼酒ありてあがりひさし船をばはめく水とウチと相四
 太平山より雪の降るを太平酒といひ、重山より雪の降るを蜜林
 酒と云上嗜喇くまのつらふあがりひさし船をばはめく
 あぐり、日をふり何と変じて酸と替ふ。これと土作に
 うめねく一年ありて、焼酒ははらねばあがりひさし
 船、薩州ありてサトラアモリこれと清人の女の口中あり
 かまてはうらとまきてふらまき船くまのつらふあがりひさし
 あし、国へくまのつらふ佳絶こととまきひのてまきひ
 とかん。

(六)

諳厄利亞の人紀行の書を見りて千八百十六年、文化十三丙子
 九月、琉球國ありて、余よは島々日本ありて朝鮮の孫
 びんその容身朝鮮人とあり、その性閑豁ありて
 柔弱なり。云々、また云アルセスト、船の乃船吏の長れ婦わく
 陸ありて、よは島の官人、おのめをうけ、ふある自貴人
 来りて、わらひある家をよくわらひ、諸器と設けね、おくべり
 いえつとある自まて、貴人船中、来りて、時、お婦人お對し、
 とね、お丁寧なり、やうめて扇とあり、おのの後き、おの
 一女好事あり、諳厄利亞の婦とらんとして、お婦、おらとね、
 一、ま、おらとね、おの婦を四方より、穴のあくわとらん、おら

君子樹と云ふ樹あり。一と福木と云ふ葉ハ冬青少似く
おちひるる。實ハ橘のてしふありありひひりて美るる。
一とカラボと云ふ葉ハ福木に似る。花ハ白梅の如し。其の
實とてちりて油ふけり。極上品と云ふ。二樹とも冬
ふらねも葉おちりて。常盤木と稱す。

つれはあや周防國小古郡八郎と云人あり。けが。主従
十八人して大隅國へ。いそんと。あなまをひし。してそ
し。ごろ。ち。月。は。り。あ。る。ん。あ。ら。ひ。ら。に。豊。后。の。海。を
し。ふ。ゆ。と。死。天。皇。須。更。ふ。更。更。一。天。皇。と。と。ご。め。く。
楫帆柱し。て。く。お。さ。ら。ら。は。は。れ。る。と。ご。う。く。千里。な。り。る。

御紀のこねをりく。船中の人。風ふきまてく。さき。火の
きめ。は。は。ら。の。こ。ら。し。え。り。や。大。魚。の。腹。中。に。あ。ら。む。
あ。ら。む。と。金。昆。羅。を。り。し。ん。ふ。り。の。ま。外。の。ま。ご。な。る。
ける。その。お。も。も。あ。ら。む。あ。ら。む。風。は。ま。り。あ。ら。
中。に。あ。ら。む。し。ご。う。ま。あ。ら。む。の。ま。り。一。丁。は。る。は。あ。ら。
山。の。あ。ら。む。魚。の。ま。り。ざ。暴。風。あ。ら。む。あ。ら。む。ひ。あ。ら。
け。と。ゆ。り。あ。ら。む。と。金。昆。羅。の。ま。り。渡。一。ま。り。
あ。ら。む。と。ゆ。り。あ。ら。む。お。さ。ら。ら。ら。
キキナと云ふ。くねひなる。の。あ。ら。む。七。里。あ。ら。む。二。三。里。あ。
ら。む。あ。ら。む。の。魚。の。ま。り。あ。ら。む。あ。ら。む。の。ま。り。あ。ら。む。
あ。ら。む。あ。ら。む。の。ま。り。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。
あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。
あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。あ。ら。む。

いふことさうだ。輪をばとひてかゝるものあらばくそめたる
 又地ふりして根をたれあひまわして門のうらたぬを
 何の樹あるをさあはば。按るは南方草木收のり榕樹ありて
 して閩廣のあごみわら。福州の城と榕城といふ剣ありてのり
 とも薩あまのりカツマルといふ詩の柳宗元が柳州の作ありてのり
 宋元明清あまのり詩賦あけくそ榕江一菴一菓一村ありて号
 廣東新語のりもはくそ。とありてのり。漁者男女數十人
 つとひてのりして何の辨にた結果をあまのりてのり地の
 名をさあはばはうだ。若くはあまのりてのり年老る人いづく
 ともあまのりてのり人いづく。日本のともあまのりた日ある
 ありてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり

日本おりのなりがなんがうにあひく。くなんさひそ。そめく
 け地をいづくあまのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり
 とらんさんふこくをねんさねんこくをいづく。ヨナクニとらふをいづく
 我の琉球國王の命をいづく。薬品をいづく。あまのりてのりてのり
 ツバノコヤカメとやのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり
 あまのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり
 あまのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり
 とはけらしてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり
 一着船。よのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのりてのり
 日本國周防人古郡八郎と名れをさあはば。てのりてのりてのりてのり
 日本國周防人古郡八郎と名れをさあはば。てのりてのりてのりてのり

一の八郎為朝とては入地はどてくうやまひおき作れ
 おう一と作らるるツバノコのおまふ滞留して日くおひておれ
 うらりしけりかへや船の出まあると帰國をどちかた
 うはツバノコがう貴国の大由そてて富饒の地あり
 あはれ何ぞとてしつふふあはれとてかたかた
 志しつふふとてかたかたあはれとてかたかた
 いふやど我先祖中あはれはあはれとてけきとて奇茶
 あつと惹意牽情散とやあはれとてあはれとてわたり人れ
 めてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 方書とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

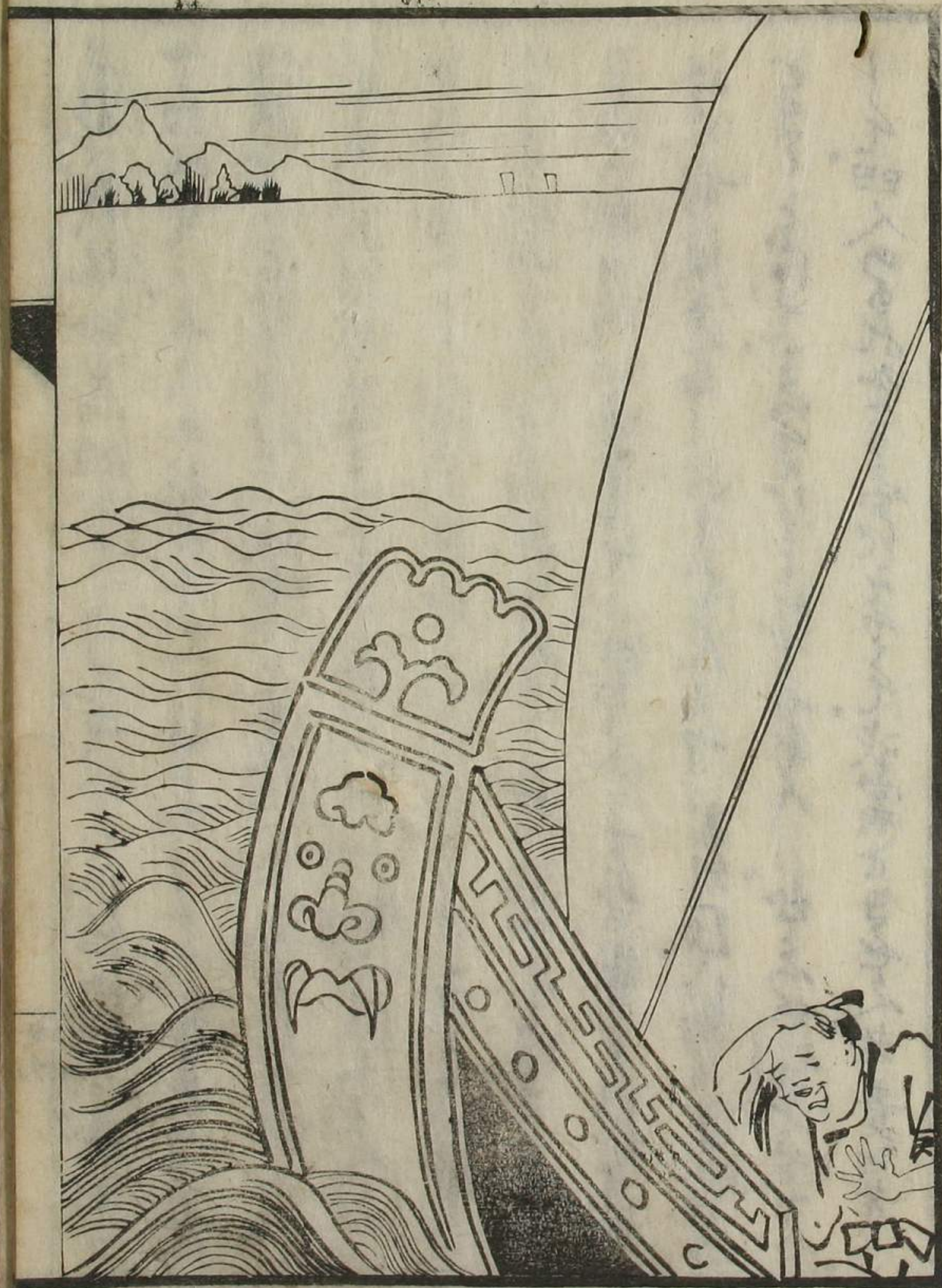
牡丹花 天茄子花 天仙子 各等分

右細末あはれ茶あはれ酒あはれおりの婦人あ飲ひ
 とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて如神

いよく出帆の時いふとて國王より四人の者をとて送
 らしむその名を孝貴伊久麻美里二那古称とていひける
 八郎あはれと思をもちしあはれとてあはれとてあはれとて
 その日あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 いふとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 めあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

たつと。又明朝も貢をせられ、交易もゆとまふ事あり。
 けし。天孫氏の代びら。隋煬帝太業三年推古天皇十五年丁卯
 よろし。しをむく。来服らいめくとて。よし。をやまし。あええ
 志とふら。同六年隋の兵船數万艘海上あり。
 陸地のゆく。蜃氣しんきけし。らんふ。乾闥婆城けんたくばじょうを。た。出さる。と。
 あや。ゆき。一。わ。の大軍。たり。首里。あ。あ。入。王。と。は
 ころ。忠臣義士ちゅうしんぎしとて。討死たうしと。や。た。ら。が。其。の。ら。貴
 国の為朝公の子。舜天王。と。四代を。へ。英祖王の時。元げんの
 至元年中建武年中。又。軍船數万ぐんせんすまんあり。ら。が。と。と。や
 我國よ。その。貴国の武威ぶい。小傳習せうでんしゅうせ。ふ。鎮護嚴緊ちんごげんげん

也。し。や。あ。あ。上陸じやうりくの。せ。せ。追おひ之。と。元貞げんていの。永仁えいじん
 の。の。あ。あ。海濱かいひんを。た。た。一日も安堵あんどの。ぬ。ひ。を
 あり。ら。が。は。あ。あ。元げんの。代。と。と。あ。あ。
 びく。明みんの。太祖たいその。代。と。と。あ。あ。洪武こうぶの。の。の。行人こうじんと。使
 と。し。と。た。を。と。と。の。の。と。と。あ。あ。と。と。
 時の王。舜天王を。と。と。九代。あ。て。察度王さたどと。て。賢徳けんとくの。と。
 けし。と。と。大國だいこくより。と。と。後代こうだいの。と。と。ひ。と。と。
 こ。た。と。と。め。と。と。の。と。と。王おうの。後子こうしの。の。と。と。
 漢かんの。子しの。あ。あ。と。と。洪武こうぶの。と。と。五ご。岡おかと。と。あ。あ。の。人ひと。三十さんじゅう人にんを。た。と。
 の。と。と。し。と。と。と。と。子孫しそん今いまに。久米くみの。南門なんもん村むら小居せういと。と。



古郡八島琉球人の
さやたと判る圖

されど我琉球が為朝公よりして孝玉の風俗も化し義氣も
中相おあり。あるあるは小国のあきあきとて孝玉の彼より
往來するところをわたり。彼より孝玉の奉貢を以てはのみ
とて孝玉の彼より往來するを以てはのみ。同船に往來するを
孝玉の彼より往來するを以てはのみ。我より往來するを
のそふ国のうねりをもたれども。孝玉の彼より往來するを
とては船を以てはのみ。孝玉の彼より往來するを以てはのみ
福く前後道あり。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の
とては船を以てはのみ。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の
して四人のものをさし。衣裳をさし。孝貴を孝八

伊久麻と伊之助。美里二と道次。那古稱を古助とあり。めく
日本人あり。そのけせが四人の者。そのけせの良策あり
うねり。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを
ひやうちや。漂着れり。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを
ふ。二月あり。水ふる。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを
を記。水の二三升あり。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを
帰國を以てはのみ。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを
西湖の景あり。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを
利し。明人とては。孝玉の彼より往來するを以てはのみ。孝玉の彼より往來するを

琉球雜信終 天保三年秋 杏花園蔵版

此玉の狂歌もすゝ昇平はれめゑ多たまたん 鶴龜の
二そとまゝ 伯父の

鶴

とびさぐく 嘴がくくあー 長々

いのちもあかくとらひはるる程

龜

あつたつたー ちぢた尾のきさげ

身をねらえんきふ龜を 茶亭

跋

先河 南 取 乃 川 橋 近 ぶ

多々ん 巾 終 水瓶の

甲に 乗る 仙 坊 子 持 山

とら 既 小 年 ち 子

及 ち 心 ち 雷 地 魚

承 乃 中 乃 乃 乃



國のつとて一二と録と伝をたす
つとてく襦袢もろつて唐代
藩のつとてくつとてくつとてく
つとてくつとてくつとてくつとてく
天保中つとてくつとてくつとてく

つとてくつとてくつとてくつとてく
つとてくつとてくつとてくつとてく



